

キリスト教と歴史学

—— 初期キリスト教史研究の立場から ——

松 本 宣 郎

1. キリスト教を歴史学でとらえる—自伝的回顧

イエスと、彼の復活を信じる者によって、東地中海世界に生まれた原始キリスト教が、全地中海世界の支配的宗教となっていく、ほぼ300年の歴史の研究が、私の専門領域である。この時代のキリスト教を「初期」と称するが、特に私は初期キリスト教徒が、ローマ帝国の住民として、その社会に生きていた側面を明らかにすることを、研究のスタート時点から一貫して追究してきたつもりである。そしてこのスタンスは、私がキリスト教徒となった家庭環境や、教会生活と不可分であったように思われる。

私の祖父はふたりとも熱心な、そしてタイプの異なるクリスチャンであった。父方の祖父は岡山出身で、内村鑑三を尊敬して札幌の農学校に入学し、無教会の信仰を得た。帰郷してからは文書で政池仁の集会の機関誌などを読んでいたが、晩年近郊農村にあるイエス・キリスト教会の教会員になった。聖書を読むことを生活の上で欠かすことがなかった。バニヤン『天路歷程』のことなど、私はこの祖父から初めて聞かされた。母方の祖父は岡山市で歯科医を開業していたが、井深梶之助や植村正久とも関わりを持った蕃山町教会に出席し、ほとんど半世紀の間、長老を務めた。真摯なクリスチャンであり、かつ快活寛容な人柄であった。私のその後のキリスト者としての生き方の模範を、私はこの二人の祖父に見ており、またことに長老教会にある者としては母方の祖父を模範と思っている。私の両親は、この祖父たちの影響で、中年になってキリスト者

となったのだ。

私が洗礼を受けたのは高校時代であったが、大学では歴史を学ぶことが最初からの志望であり、原始キリスト教をテーマとしたいとの意識は早くから生まれていた。東京大学の教養学部の2年間、西洋古代史のヘレニズム時代、古代キリスト教史が専門の秀村欣二教授に特に親しく教えを受け、同教授と、キリスト教思想史の前田護郎教授が指導していた聖書研究会というサークルにも属した。両教授共に無教会の信仰者であった。同時に、教会人である荒井献氏の新約学研究からも学ぶことが出来た（『イエスとその時代』の荒井献氏（『荒井献著作集』1「月報」7 岩波書店2001））。

大学3年生になって、古代史の少し専門的な研究を知り、東大に非常勤講師で来ていた弓削達氏から学ぶことになった。氏は教会人で、社会学者でローマ帝国とキリスト教を研究テーマの一つとしていた。早めに私の卒業論文のテーマについて教えを請い、原始キリスト教の時代をやりたいと私が言うと、「史料は限定されているし、新約学者が綿密にやっているから、もっと後の時代、たとえば「大迫害」などはどうだ」との答えで、当時（1968年）刊行直後の、英国のW. H. C. Frendの大著を貸してくれた。これをそのまま卒論の対象としたのである。大迫害とは、303年から10年間にわたった迫害で、ディオクレティアヌス帝が始め、コンスタンティヌス帝のミラノ勅令で終止符が打たれた、初期キリスト教に対する最後の迫害である。

このように、研究の出発点で私はよき先生たちに恵まれた。現在までの研究の歩みは、間違いなくこれら諸教授たちの影響抜きでは考えられない。もちろん、大学院に入り、研究職について、さらに新しい先達同輩との出会いがあり、書物で学んだ欧米の学者たちから受けた影響も小さくない。ただ、もうひとつ、多分私の心性の深いところまで動かし、物の見方自体を変えさせた出来事が、1968年の東大紛争に端を発する、全共闘運動とそれに連動した、日本基督教団の動揺を含む、行動的知性の問題提起であった。これらの運動自体に深く関わることはなかったのだけれど、そこから私が感じとったことは、歴史学の学問方法として、社会総体を把握するとか、大衆に目を向けるとか、権力者であ

れ労働者であれ、その行動の歴史を単純な史料の読みでは再構成など出来ないことに気づかされる、など、要するに歴史の見方を深く、鋭くする契機となったのである。また、大学も日本社会も動揺を経験したこの時期に、教会生活をほぼ欠かすことなく続けたことは、世俗の大学の歴史研究の場に生きながら、私がキリスト者としての視点を失わずにいられた背景となっただろう。

東京大学から東北大学に働き場を移して、私はキリスト教の歴史をローマ帝国の歴史の一分野として研究する作業を一貫して進めた。自分の視座は神学あるいはキリスト教学の、歴史神学でも教会史・教理史でもない、という意識は強かった。つまるところキリスト教徒の、社会における生き方を歴史学的に研究する、というテーマがかなり早い時期に固まったのである。

私の研究姿勢は、修士論文（大迫害時の最も苛烈な迫害帝であったマクシムス・ダイアの政策を扱った）作成の時でもすでに多くの欧米学者の業績とそ
の方法に学び、影響を受けて作られていったのだが、専門研究者となって、授業の演習のためにとりあげたテキストの著者 P. Brown の研究に触れたことはもっとも大きな出会いだった。彼（英国出身で現在米国プリンストン大学）は古代末期の社会について、キリスト教を含む古代地中海世界の宗教・意識、要するに心性の展開を巨視的に捉えようとする、独創的な学者であり、私のみならず世界の多くの研究者に対して問題提起をなし続けている。私のそれまでの初期キリスト教徒迫害の研究が漠然と意識していた、社会におけるキリスト教徒、という問題をブラウンはきわめて鋭く、構造的に示してくれたのである。

これらの研究者から影響と刺激を受けて、私の初期キリスト教史研究は続いている。以下の節では、そのような視点から、特にローマ帝国社会の歴史と初期キリスト教の関わりについての私の解釈と、新しい研究動向を述べてみたい。（「初期キリスト教論」（岩波講座『世界歴史7 ヨーロッパの誕生 4-10世紀』岩波書店、1998。「社会的存在としての初期キリスト教徒」（『季刊教会』47〈日本基督教団改革長老教会協議会〉2002）

II. 初期キリスト教とローマ社会史

(1) ナザレのイエス像

歴史学者として、ナザレのイエスをローマ史の中に位置づけることにキリスト者としてある程度のとまどいを覚えたことはある。私自身の信仰の告白としてのイエスについて、そのまま講義し、論文を執筆することは出来なかったからである。

現在、歴史の分野で記述するとき、私はイエスを、史的実在人物とすることは当然として、以下のように捉えている。彼はユダヤ教の伝統の中で自らを救い主、神の子であるとの自覚を持ち、権威主義に堕したユダヤ教の指導者を批判し、下層の貧しい、あるいは女性ユダヤ教徒にも眼差しを向け、悔い改めと神の救いを説いた、ラディカルなユダヤ教革命家であった。ユダヤ教指導者は彼を社会と政治に不安をあおる存在だとして、ユダヤにおける重罪裁判権をもつローマ属州総督に訴え、総督はイエスを処刑した、と。イエスの死後、彼が復活したと信じる弟子たちの群れが結束を守り、原始キリスト教が生まれた。歴史上のイエスについての研究書は、今なお出され続けている。イエスをユダヤ教上層の批判者、反ローマの政治革命家と見る者はなお少なくないし、また癒しの奇跡で大衆を惹きつけたカリスマ宗教家、とする見方もあるが、私は極端な政治性をイエスに当てはめるべきではないと考えている。

(2) 史料としての新約聖書

ペトロとパウロの伝道と、初期の教会の状況は、より安んじて(?)研究対象となし得ると思うのだが、新約聖書のカバーする時代については、歴史史料としての新約をどう評価するか、という問題がある。イエスのなしたとされる奇跡を記す福音書の記述がよい例である。新約の著者は信仰の告白として、あるいは宣伝、弁明のために書いたのだし、また新約学研究においては、編集の意図が重視されて、記述の事実性には信頼がおかれなない、という状況がある。私は、他の多くの歴史学者と共に、新約諸文書、ことに原始キリスト教についての「使徒言行録」の記述は、基本的に史的事実を伝えている、と見なしている。文学作品にありがちな誇張や虚偽は含まれるにしても、新約以外の古代ギリシ

アやローマの史料と比較して、決してその価値は低いものではないのである（これらの点については「ローマ社会史から見た初期キリスト教」（『歴史と地理』518〈世界史の研究177〉山川出版社、1998）参照）。

原始キリスト教の成立は紀元30年代後半である。最初の集団はユダヤ教徒からの改宗者であり、ギリシア人、ローマ人の参加も認められるようになるが、それ以後もキリスト教はそれほど増えることなく、3世紀までローマ帝国社会の少数者であり続ける。新約文書以後、使徒教父文書（イグナティオスなど）・聖書外典、偽典（ペトロ行伝など）・殉教伝・教父著作・護教論・教会史等、キリスト教は多数の文書を生み出してゆく。ローマ帝国にいたる古代地中海世界の中でこれほどの活動を示した宗教集団は皆無であるが、だからといってキリスト教徒の実数と社会への影響力を過大に評価することは決してできないのである。

（3） 初期キリスト教徒の社会層

原始キリスト教会においては「原始共産制」の実現などということが聖書から推測される、という見方もあったが、「使徒」の記述はむしろそれを否定し、信者たちが献金を拠出して教会財政を維持するというシステムが最初からあったことを示している。

それはともかく初期のキリスト教徒の多くはユダヤ教徒であったことは間違いない。ユダヤ教徒はローマ帝国の都市の人口の一割から二割を占めるほどいたと言われる。富んだ者もいたが社会的には元老院議員や騎士身分、都市の参事会員のような上層に達することは出来ず、中下層を占めていたと思われる。キリスト教徒が現れたガリラヤは農村であったにしても、主要なメンバーはイエルサレムで、ユダヤ教徒と、不和も生じさせつつ重なっていた。やがて不和が決定的になって、キリスト教徒たちの拠点はユダヤを離れた東地中海の都市、アンティオキア、エフェソス、コリント、フィリピ、テサロニケなどに生まれてゆく。ユダヤから旅立ったキリスト教徒がたどり着けるのは、港を持つ都市であった。そこにはすでに多くのユダヤ教徒がいて、シナゴグに集まっていた。

キリスト教徒はそこを最初の拠点とし、やがて独立の小集団を形成していったのだ。パウロはそのようにして生まれた諸都市の小教会に伝道し、非ユダヤ教徒をも迎え入れたのである。

最初のころの非ユダヤ人でキリスト教に改宗してきた人々は、それ以前からユダヤ教に惹かれ、シナゴグに出入りしていたギリシア人、ローマ人だと思われる。そうであった以上、彼らもまた都市の中下層民であったと推測される。

かつて、キリスト教が神の前における人間の平等を説いた、として初期の教会は多くの奴隷たちを迎えた、と主張された。それは正しくあるまい。奴隷は所有者の支配下にあり、自由に自分の信仰を選べなかった。キリスト教徒が所有した奴隷にはその可能性はあっただろうが、初期の史料を見る限り、奴隷のキリスト教徒は多くはない。もっとも、ローマ帝国時代の奴隷は解放されることが普通で、その解放された人々は、社会的な地位が安定せず、自分の共同体というものも持ちにくかったから、キリスト教に救いを求める可能性が高かった、と推測する学者もいる。確実だとまでは言えないように思われる。

(4) キリスト教徒迫害

キリスト教徒はローマ帝国政府や都市の権力者による迫害に常にさらされていたわけではない。皇帝ネロがローマの火事の放火犯として多数のキリスト教徒を処刑したことを、ローマの歴史家タキトゥスが『年代記』15巻44節で印象的に記しているが、これはローマ市だけで、ごく一時的に生じたもので、しかも教徒は信仰を問題とされたのではなく、放火の罪を着せられたにすぎない。しかし、彼らはローマ市の人々から、「忌まわしい行為で恨み憎まれ」、「有害きわまりない迷信」と見なされていた。その理由については、案外明確な答が与えられていない。

このことについては次項で触れる。さて、1世紀末ころには、キリスト教徒は胡散臭い少数者のグループと見られていたが、通常は黙認され、個人の家を礼拝所として集まっていた。しかし、都市住民のだれかが、何らかの理由でキ

キリスト教と歴史学

リ基督教徒に悪意を抱く事態になると、彼はその教徒を都市の役人、(イタリア以外の属州の場合)多くは時々その都市を訪れる総督に告発している。総督はこれを受けて裁判を行い、キリスト教徒であることを認めたら処刑した。初期キリスト教への迫害は、このようにして生じるものであった。明白な事例は2世紀初頭の小アジアのポントス地方のこととして、タキトゥスの友人でもあった総督小プリニウスが、トラヤヌス皇帝宛ての書簡の中で詳細に記している。トラヤヌスはキリスト教徒であることを証言し続けた者を処刑することを是認している。これが最初の措置ではなく、1世紀の、いつかの時点でその先例が生じたのであろう。

ところが、そのトラヤヌスは、総督は市民の告発がなくてはキリスト教徒の裁判を行ってはならず、また匿名の告発を受理してもならない、また告発された教徒が裁判に際して信仰を捨て、形だけでも神々の像を礼拝すれば、過去を問わず釈放せよ、と命じている。ローマ帝国はキリスト教徒の存在を、実質的には黙認していたと言ってよいのである。皇帝がキリスト教徒を特定して迫害を命じるのは、3世紀半ば以降のことであり、それまではキリスト教を禁止する法律などはなく、迫害は都市において、市民たちの間から時折自然発生的に生じるものに留まり、時間も地域も限定されていた。また都市や属州の役人は、告発があって初めてキリスト教徒と対峙し、状況を勘案して処刑する事も釈放することもあったのである。

キリスト教徒は、ローマ帝国においていわば矛盾した位置におかれていた。都市に外部から流入した、ごく少ない人々の群れで、社会に対して閉鎖的で非協力的な存在と見なされた。特に都市の伝統の神々への礼拝や祭典に彼らが加わらず、神殿や神々の像を斥ける姿勢を示したり、家族の中で信仰を守るために孤立して反感を買って、迫害を招くことになった。時にそれが都市全体の迫害に至ることもあった。2世紀にはスミルナやリヨンにそのような例が生じた。そのような状況下でキリスト教徒の中には、迫害者に対して熱狂的に自ら殉教の死を求めるような行動をとる者が現れ、逆に迫害に容易に屈して総督が命じるまま、神々や皇帝の像に礼拝する棄教者も出た。

(5) キリスト教徒の心性

キリスト教は、その実数がまだきわめて少なかった 1 世紀末から 3 世紀初めのころからすでに多量の文書を生み出した。そのこと自体、古代世界では珍しい集団であったと言える。それらを読むと（私は、上記の通りこれら文書は信仰や教理上、また護教的観点からの創作を多く含むが、少なくとも古代世界の意識の枠組みや社会的な空気を十分把握できる情報に満ちている、と考えてこれらを利用する）、初期キリスト教徒が社会に与えていた、特異な、あるいは新しい行動様式や心性をうかがうことができる。また、彼らについて、ローマ人、ギリシア人作家が言及した文章も、タキトゥスを初めとしてルキアノス、ガレノスら、多くはないが知られている。それらからも彼らの与えた、一種の奇妙な印象というものがうかがえるのである。そのような観点から鋭い考察を行ったのが P. Brown である。

「神と富とに兼ね仕えることは出来ない」との言葉に示されるような、富と貧しさについてのキリスト教の観念は、なによりも財産を持つ豊かな市民が評価され、権力をにぎるものであり、下層の貧民は侮られるものであった地中海世界の都市の社会においては異質な考えであった。キリスト教が、富を人間の罪と結びつけ、貧しい民衆に教会の門を開き、神の前の平等を実践したことは間違いない。富者が教会に入ることに抵抗があったであろうが、現に豊かなキリスト教徒は存在するようになる。彼らは有り余る富を献金することによって、貧民教徒を助け、自分たちの罪を減らせる、と教えられるようになる。ローマ帝国都市には、富んだエリートが、都市共同体のために様々な財政的奉仕をするならわし（エヴェルジェティズム）があった。キリスト教会はこのならわしを、独特の意味づけを施して受け継いだと言えるだろう。

社会的な地位や名誉を空しい、とする価値観もキリスト教文書では強調された。4 世紀からはローマ市などで教徒の墓碑や棺が多く出土するが、それらの文言は、都市市民が生前歴任した公職を列举してきたのとは対照的である。「死」の捉え方にも一般社会との違いが示された。死を最期と見なさず、神の国の到来の時までの眠り、と解した。このような観念が、激しい迫害に際して

キリスト教と歴史学

殉教志向の教徒が死を恐れない、ということを可能にしたのである。やはりローマ市に多数あったキリスト教墓地、カタコンベは、教徒が迫害の中、秘かに隠れ集まっていたところではなく、日常的に礼拝するために集う場所だったのである。眠っている先人と共に、彼らは永遠の神の国を先取りして味わっていたのであろう。

キリスト教徒が求められた倫理・道徳についてもいくつかの新しさがあった。小プリニウスは、裁判に際して教徒の行状を調査したが、その結果、「彼らはキリストに対し、あたかも神に対するごとくに、こもごも歌を唱い、また何か犯罪をしようという誓いではなく、けっして盗みをしないこと、強姦や姦通をしないこと、信義を破らないこと、預かったものを、求められた時には拒まないことを誓った」と報告している。プリニウスは、これらの悪事をキリスト教徒が実行している、という中傷を耳にしていたのだろう。キリスト教徒は幼児の肉を食べる儀式を行っている、という噂も執拗に口にされたようだ。

もちろん上で述べたキリスト教徒の新しい倫理とは、このような悪事ではなく、たとえば一般によく行われていた「嬰兒遺棄」を忌避したこととか、イエスの言葉にあった「汝の敵を愛せ」あるいは「迫害する者のために祈れ」というような、当時の社会通念の裏返しの倫理である。

ことにBrownだけでなく、多くの研究者が強調するのが、キリスト教徒の肉体と性についての観念の特異性である。人間の罪のもっとも分かりやすいものの一つを、彼らは肉の弱さに見た。パウロの考えがことに禁欲を信者に勧めた。完全に性を絶て、というのではないが、結婚はせぬ方がよしとし、再婚が嫌われ、同性愛が特に罪の象徴とすらされた。その後の文書でも、外典文書などで肉欲の危険性が繰り返し触れられる。

こうして、性欲の抑制が信仰生活の重要な位置を占めることになってくる。処女と童貞の教徒が教会内で高く評価され、既婚者でも、性的関係を持たない夫婦が名誉ある立場にあるとされる。初期の教徒の間では接吻を交わすことを重視していたが、男女が交わす接吻をやめるように命じられる。すぐれた信仰者の要件に、性的誘惑を拒否できること、あるいは異性と同宿しても性的関係

を超越できること、が加わった。このような肉体と性とを忌避する態度はローマ帝国社会においては異質ではあった。ことにアウグストゥスが、内乱を收拾した後、政情の安定と共に、内乱期に低下していたモラルの復興と、婚姻・家庭というものの復権を政策として進めて以来、ローマ社会では子を産み、育てることが（子捨てはなくならなかったにせよ）大事だとされたから、それと背反する方向のキリスト教徒は好意的には見られなかった。

もっともキリスト教が性の忌避にこだわった背景には、彼らがいかがわしい儀式を実行する集団で、性的にも乱れている、と見なされた事実があったらうと思われる。都市の中でごく少数派で存在していたキリスト教徒としては、いたずらに外部から誤解されることを避ける必要があり、ことさらに厳しい倫理を自らに課したのではなかったらうか。

(6) キリスト教徒の融和的態度

キリスト教徒がローマ帝国・地中海世界の中で、特異な存在であったことの主張は、ともすればキリスト教の社会における先進性や卓越性を示す立場からなされることになる、それは畢竟キリスト教護教論の陥穽である、という批判的論点が、R. MacMullenやG. E. M. de Ste Croix、保坂高殿などによって提示されている。

富と貧しさという問題では、キリスト教会においても富者教徒が尊ばれ、司教が豊かな生活を営んだ例も多く、一般社会の富への評価のイデオロギーがキリスト教をもしばっていた、と言われる。このことについては上で述べたように、キリスト教的な貧富の観念の特色で、ある程度説明されるが、教会における世俗化の浸透は否定できない事実である。

性的禁欲を実行したのは、ひとりキリスト教徒だけではなかった、という証拠も示される。キケロー、小プリニウスらのストア哲学を奉じたローマのエリート政治家たちには、性への無関心があり、不身持ちなローマ人への侮蔑的感覚が見いだせる。夫婦間の貞節は1, 2世紀共通してローマ帝国にとって好ましい倫理課題であった。反面、キリスト教徒の間でも性的な弱さを持つ人々の

存在は絶えなかったものであり、いわゆる墮落聖職者（一例が3世紀東方サモサタのパウロス）もいた。マルキアはコンモドゥス帝の愛人であったが、キリスト教徒に寛容さを示した、として彼女に好意的なキリスト教側の伝承もある。性的関係に対するスタンスは一般都市民とキリスト教徒との間でかなり共通していたことになる。

都市民衆が熱狂的に楽しんだ、戦車競走や剣闘士競技、野獣を殺戮するショー、演劇などの公共の娯楽をキリスト教徒はあるいは墮落だとし、また偶像礼拝につながるとして忌避したこともキリスト教史側から強調されることがあった。これについては、まず、熱狂性を愚かなこととして、この種の催しに冷やかな発言をしたのは、まずローマのストア哲学者であったとされる。ティベリウス帝はそのために民衆から不人気だったと言われ、2世紀の修辞家ディオ・クリュソストモスも皇帝マルクス・アウレリウスも競技に夢中になることの無意味さを説いている。

これについても反面の事実があった。マルクス・アウレリウスのような皇帝も、口とは裏腹にローマ市大衆のためには剣闘士競技のための豪勢な支出を惜しまなかったものであり、競技場のパフォーマンスは、皇帝と民衆とのふれあいの場とし機能し続けた。それはキリスト教を公認したコンスタンティヌス帝以後もさほど変わることはなかったのである。

古代世界に固有の奴隸制とキリスト教の関係も、上と同様の観点から再吟味される。古代世界は生産においても社会生活においても奴隸所有抜きでは機能し得なかったし、市民は奴隸の存在を当然のこととした。そしてキリスト教徒もその奴隸観を共有していた。ローマ人は元来、奴隸を解放することもよく行い、市民の奴隸が解放されるとすぐ市民権を与えていたが、キリスト教はむしろ奴隸の解放には消極的だった。教会は、多神教よりもヒューマンで、非人間的な奴隸制には、古代世界で率先して反対した、などという主張は成り立たない、とMacMullenらは言う。4世紀のキリスト教公認後のコンスタンティヌスらの皇帝たちも奴隸制を所与の前提として、何ら廃止の動きを示さなかったのだ、と。

これは事実に近いだろうが、一面的な見方ではある。ギリシア文化圏の奴隷解放はしばしば神殿での儀式を必要とした。司教たちは偶像礼拝にふれる解放の行為を避けるよう指導したと考えられる。他方でキリスト教徒の信仰共同体においては奴隷を自由民と同等に受け容れていたことも認めるべきであろう。そしてこの面でも、すでにヘレニズム時代の末期から、哲学者たちの間で奴隷も人間であり、非道に扱うべきでないと主張され、あるいは奴隷制そのものの矛盾が指摘されていたことが想起される。帝国最盛期のストア哲学者セネカにも同様の表現が見られるのである。

キリスト教の反戦平和主義も、過度に強調されるきらいがある。2世紀末のテルトゥリアヌスは、ローマ帝国社会のあらゆる働き場にキリスト教徒がいる、と誇らしげに言うが、その中にはローマ軍隊も含まれている。木寺廉太の研究（『古代キリスト教と平和主義』立教大学出版会、2004）が示すように、教徒兵士は、少数ではあるが早くより見出され、中には信仰を告白して殉教した兵士も知られるが、キリスト教会が兵役忌避の主張を掲げたとは言えない。

権力や富を得るために買収やコネなどの不正な手段をとる風潮は、全歴史を通じて知られることであるが、ローマ帝国も同様であり、ことに皇帝権力が強大化し、官僚の階層化と税の加重、帝国民の権利の抑圧が進んでいった4世紀は、負担を免れようとする人々が顕著に社会的不正に手を染めるという状況になった、と近年の研究が主張する。付随してこの時代、社会を覆う一種の閉塞感が、扇動家の出現によって物理的な暴力を引き起こしたことも知られている。それはときに都市における騒擾すら招いたのである。

キリスト教もまたこの潮流に棹さしていた、というのである。すでに3世紀、カルタゴを中心に多数の教会があった北アフリカでは司教の座をめぐる争いが激しく、買収も行われている、とカルタゴ司教キプリアヌスが伝えている。3世紀半ばと大迫害の時代に、キリスト教徒をねらって、皇帝が国民に伝統の神々への祭儀参加を強制した例が何回かある、その際に役人を買収して祭儀証明書を手した、「不正」な教徒が現れた。彼らは迫害後の公会議で処罰されている。あのアウグスティヌスも、司教として様々な世俗のことに関与してい

るが、教徒の出世のために有力者に口利きをし、なにがしかの賄いを送ることを、当然のことと示唆しているのである。また、公認されて以後、キリスト教会内部の正統異端の対立が表面化し、かつ激烈になる。その中で繰り返し暴力が用いられたのである。三位一体の教説の確立者とされるアタナシオスだが、アリオス派との抗争において互いに敵を殴打、拘束したり、教会にバリケードを築かせたりさせた、と言われる。

このように初期キリスト教徒も、一般社会常識と齟齬しない行動をし、似たような意識をもったことは多くの面で指摘され、それは事実であろう。しかし、そのことの意義には限界を付すべきである。ある意味で、ローマ帝国の住民であったキリスト教徒としてこれらは当然のことであり、なおかつキリスト教徒がひとつの群としてローマ帝国に存続できた理由の、あくまで一面として、理解すべきであろう（『古代末期地中海世界とキリスト教—心性史的考察の試み—』（『地中海学研究』XIII 1990）参照）

Ⅲ．初期キリスト教史研究の展望

前節では、これまでの初期キリスト教徒の社会史的研究の流れを私なりに整理してみた。最後に、その流れを受けて、現在も発見的、生産的に続けられている諸研究から、いくつか私が重要と思う論点を挙げてみたい。

(1) ユダヤ教徒の間からキリスト教徒が現れたことを、より重視する研究が目立つ（保坂高殿など）。パウロの異邦人伝道が注目されすぎて、イエスの兄弟ヤコブ、それにペトロも有していたユダヤ教的要素—シナゴグと関わり続ける、ユダヤ教の祭礼や規定を守り続ける、など—の認識の不十分さが指摘されるのである。「キリスト教徒」という呼称が、アンティオキア市で、非キリスト教徒から出てきたことは象徴的である。キリスト教徒自身が、自分たちをユダヤ教のうちにあると見ていた期間は案外長く、いわゆるキリスト教徒のアイデンティティの確立は2世紀まではなかった、とされる。従ってローマ帝国による初期のキリスト教徒迫害も、1世紀の間はユダヤ教の跳ね上がり部分への弾圧と認識されていた、ということである。しかし私は、64年のネロ帝の迫

害はそうのように考えてもよいが、70年のユダヤ第一次反乱後、これからキリスト教徒が離脱したという伝承を信じ、依然としてキリスト教徒のアイデンティティの確立を1世紀末に見たいのである。

(2) アイデンティティと関連して、初期のキリスト教徒を一様に、同じ信仰、同じ心性の持ち主だった、と単純化すべきではない、という問題が提示されている（K. ホプキンス、本村凌二他訳『神々にあふれる世界』岩波書店、2003など）。原始教団にすでに異端と見なされた者たちがいたことは確実で、それもキリスト教の多様性の一面であったのだが、ホプキンスらが言うのは、そもそも正統の概念自体がまだ成立せず、1～2世紀にはイエスの理解ひとつとってみても複数の考えが存在したということである。人の子、神の子、助け主、キリスト、などの多様な呼称がそれを反映しているかもしれないということである。また、教徒と教会の関わりについても、周辺にいただけの者、入ってきてすぐ去ってゆく者（「イージーライダー」）などと多様だった、とされ、このようなキリスト教徒集団は、ローマ帝国における、やはり多彩な神々の信者たちと比較考察されるべきだろう、とも言われる。パウロの「信仰はひとつ、バプテスマはひとつ」という言葉が、唯一でカトリック（普遍的）な信仰を謳っているにしても、その陰で抑え切れぬほどに多様で、多分に偏りがちなもろもろの信仰を教会は抱え込んでいた、ということになるだろう。

(3) キリスト教そのもの、あるいはキリスト教徒の心性を巨視的に眺めるということがもっと考究されるべきである。1世紀に生まれ、3世紀までは都市の超少数派であったキリスト教が、3世紀後半から4世紀に大きく増加して、ローマ帝国における立場を逆転させた過程を見る視野を拡大させるということである。皇帝権力のあり方、経済の変動、ギリシア・ラテン文化と地中海周縁民族の文化との相剋、都市の総体的な衰退、住民移動、奴隷から市民へ、平民から騎士などへの身分的上昇、外民族の侵入、などの現象が、結局は古代地中海世界の特質の変化、衰退をもたらしたことは間違いのない事実である。初期キリスト教の歴史はその際、研究上きわめて効果的なケーススタディのテーマを提供するであろう。キリスト教と魔術、教徒のついた職業、社会倫理、軍隊

との関わり、などが研究されてきたのも、この大きな問いへの回答として位置づけられるべきなのである（「古代地中海都市の衰退とキリスト教」（『西洋史研究』新輯32, 2003））。

（4）上記（2）と関連することだが、キリスト教が徐々に広がっていったローマ帝国は空前絶後の広大な世界を占めていた。都市が支配のかなめとなり、帝国全域に外見上共通の都市が散在し、初期キリスト教徒の多くがそこに居住していた。しかしながら、たとえば2世紀のパレスティナ、小アジア、ギリシア、イタリア、あるいはアフリカ、ガリア等、キリスト教徒の存在が確かめられるこれら地域を比べるなら、それぞれの地域の言語、民族、文化、社会、地勢すべての面で極端な相違と多様性があることは明かであり、それぞれの地域にいたキリスト教はその多様性をどう反映していたのか、という問題が残されている。

一方で、どこにあらうとキリスト教は一つであるべきだ、との先述のガイドラインがあり、努めてその実現は志向された。他方で、2世紀に小アジア田園で生じたモンタノス派の運動は、すでにキリスト教以前から存在していた独特の熱狂性と、また3世紀初め、カルタゴのペルペトゥアらの殉教は、北アフリカ特有の幻視傾向と結びつく、と言われ、キリスト教徒が示した地域的特異性は無視できない。また、帝国の首都ローマの教会が、3世紀以後は西方の最有力教会となったのみならず、東方の教会に対しても強力な指導力を発揮し、しかも一貫して正統信仰の旗手たりえた背景に何があったのか、という問題にも注目したい。あわせてそのローマ教会の、ガリアのルグドゥヌムや小アジアのスミルナ、東方のイェルサレム、アレクサンドリア、さらにはカルタゴなど、地中海世界諸教会との頻繁な文書と人物の交流が示す、活発な教会間ネットワークの存在には驚くべきものがあり、キリスト教の均一性志向と地域的個性という両面との関連もまた興味を引く課題である。

（5）キリスト教の「発展」を手放しで強調することはもはや不可能であるが、ではキリスト教の「徐々たる」拡大の実態はどうだったのか。このことについては19世紀のA. ハルナックが包括的に論じて以来、あまり論議を呼ばな

かったが、社会学者R. Starkがキリスト教徒人口増加曲線のシミュレーションを提供し（起源の時1,000人、250年117万人、300年630万人）、話題となっている。それに加えて、女性教徒が多かった、若い教徒が多かった、などの論点もこれからの作業である。

IV. むすびに代えて—アンビヴァレントな初期キリスト教

初期キリスト教とローマ帝国との、特に社会における関係の歴史の研究の、現況や展望を述べてきた。なお明らかにすべきテーマは多いし、私自身体験したことだが、他の歴史学分野、またときに歴史以外の、思想・哲学・経済などの分野における新しい方法や新知見が、私の課題に光を投げかけることが大いにあり得るのである。またそのような機会を得るべくアンテナを機能させていきたいのである。

もう一つのキーワードとも言えるのが、初期キリスト教史にしばしば見出される「アンビヴァレント」性というものである。上で既に何度も指摘したことであるが、文書史料を膨大に生み出しながら人的実数が極端に少なかったこと、死刑される対象であるのにかなり自由に活動できたこと、極端に熱狂的で殉教志向の教徒と信仰弱く、迫害にすぐ屈したり教会を去ってゆく教徒の共存、このように両極端の人間や行動、現象、思考がほとんどの面で指摘できるのが初期キリスト教の重要と思われる特性である。この点を常に念頭に置き、またその現象を出来るだけ洗い出し、その理由を問うてゆくこと、これも私の研究の基本スタンスである。

（まつもと のりお）